



先天性ハーレム体質

常に食傷で、でも性欲は無くならなくて

執筆：宅宅え宅じ

あらすじ

モテたい、だってえ!?

ハーレムを味わってみたい、だってえ!?

馬鹿らしい。これだから無知は困るんだ。

ハーレムを味わいたい、モテたい……

経験したことがないから、そんな無責任な発言が出来るんだ。

実際に我が身へと降り掛かった時を、少しでも考えてみるが良い。

そもそも男は、女を一人しか満足させられないように出来ている。

男は、日に何度も射精が出来ない。絶頂すると、とんでもなく疲弊する。

一度でもオーガズムに至れば、何十分も休憩が必要になる仕組みだ。

だけど、女はイツてもイツても立ち上がってくる。

よって男なんて本来は、一人の女すら相手にするのが難しいものなのだ。

良い仕組みだと思う。俺のような例外を除けば、だけど……

『先天性ハーレム病』……生まれつき俺を蝕む因子だった。

ひよっとしたら、前世で全く異性に所縁の無かった俺が、なにか恨みつらみの黒魔術でも使ったのかもしれない。

その所為で現在の俺は、生まれながらにしてハーレムの地獄から抜け出せない人生を味わう羽目となっていた。

ありとあらゆる女を否応なしに惹き付けて止まない体質に、どれだけの苦労を強いられてきただろうか……

女は、俺を視ただけで……いや、気配を感じただけで発情してしまうらしく、匂いに誘われるように、ふらふらと近付いてきては、俺に纏わりついてきて……申し訳なさそうに求めてくるのだ。

そう、申し訳なさそうに……これがタチ悪い。

別に催眠術に罹っている訳では無い。理性を失い、ゾンビのように襲ってきてくれた方がマシというもの。セックスした後、エロ同人の如く都合よく記憶が抜け落ちてくれれば良かったのに……

残念ながら、相手の理性はしっかりと保たれた儘なのだ。

その上で、この極めて身勝手な体質が無理やり女子を発情させるから……いつも謝られる。号泣しながら、女子が謝ってくる。

俺の姿を見かけた瞬間に欲望が渦巻くも、だからと言っていきなり襲い掛かる訳にも行かず、まず女子は自分との激しい葛藤に苛まれる。けれど、どうしても俺のチカラに抗うことは出来ないらしく……結局は俺に謝りながら襲い掛かるのだった。

自主退学 涼芽

某日。小樽翔太は、久しぶりに学園へと赴いた。

彼はと一年振りになる。赴いた理由は、退学届けを出す為だった。

「結局、殆んど通えなかったな。これから、どうすれば良いんだ……」

閑散とした休日の学園を見上げながら、翔太が寂しげに溜息を漏らす。憧れの学園生活を、もう少し享受したかったと、うつすらに悔し涙も浮かべていた。

とりあえず進学してみたものの、やはり足を引っ張るのがハーレム病である。学園には、何百人という女子が居る。

無理やりに惚れ込ませてしまう能力があつては、どうしても穏便な生活なんて有り得ない。そんなことは分かつていたけど、青春を諦めきれなかった。

業を極力抑えるようにマスクして眼鏡して存在感を消せば、もしかしたら……という浅い考えも虚しく、結局と翔太は体質の所為で学園に馴染めなかった。

「クラス中の女子が一斉に発情する光景は、いまでも忘れられないな」

授業中に、隣の女子から唐突にキスされた日を思い出す。

そつと忍ばれた手が翔太の股間を這い、そのまま射精するまで延々と撫でられ続けるなんて日常であり、酷い時には「私も」「私も」と、授業中にも拘わらず教室の女子が群がってきたこともあった。

翔太の周囲に居るだけで強制的に発情するのだ。

理性まで剥がれる訳では無いから、最初こそ女子も我慢はしてくれるものの、ダムが決壊すれば、後は押し寄せるのみである。行為はエスカレートの一途で、その様子はパニック映画そのものだった。

このように、どれだけ存在感を消そうとしても、誰か一人と絡んでしまえば、忽ち翔太の業が学園中に伝染してしまい、全ての女子が避難訓練の如く集まってくるのだから、学び舎に通いたい者からすれば、この上なく迷惑な話だろう。

女子に愛でられて、男子に疎まれて……

自粛を決めた翔太の以後は、ずっと引き籠もるだけの毎日だった。

「治る訳じゃないんだから、もつと早くに辞めれば良かったかな。はあ、学生を辞めたら無職だよ。働かなきゃ……でも、俺に働き口なんてあるのか……」

引き籠もりが長かった所為か独り言がボロボロと零れている。零しながらも、人目を気にしながら学舎へと入っていく。



体つきからして子供っぽく、ちよこまかと素早い動きを見せる点から、翔太は「猫みたいな奴」と表現している。ただ、背は低いものの出てる所は出ており、脱げば良いプロポーションの持ち主でもあった。

ちなみに、見た目に反して（？）成績優秀であり、しかも翔太の居ない所では寡黙だという噂もある。体質的に、会えば涼芽も例外なく発情する為に、とても信じがたい話だと翔太は思っている。

「はあ、翔ちゃん超久しぶり♥ こっちは、ずっと翔ちゃん不足だったのにさ」
「お前とは定期的に会ってるだろ。前に会ってから、まだ一か月くらいじゃん」
「アタシは毎日でも会いたいのだッ!! ほら、充電させてよっ!!」
「ちよ、ここで……んっ……!？」

翔太の首根っこを掴むと、涼芽が無理やり唇を重ねてくる。身長差がある故に、殆んど抱っこする形である。会えば毎度お馴染みなので、すぐに翔太も受け入れる。涼芽は翔太のハーレムを理解する唯一の存在である。よって、年頃の翔太も遠慮は無かった。

「んっ、ふうっ、んんんっ、翔ちゃんっ……あああ、相変わらず、凄いの……ふあああああっ、キスしてるだけなのに……こうして抱き締めてもらってるだけなのに……なんでっ、んんんんんんっ!!」

「おまつ、唾液の量……どうなってるんだよ……」

「翔ちゃんに暫く会ってなかったから、こっちも溜まってんのっ!!」

まるでエンジンのように喧しい鼻息を少しも隠そうとせず、実直に翔太を貪り続ける涼芽。翔太へと抱き着いてからというもの、体内にて延々とオーガズムが駆け巡っており、唇を重ねたが最後、バケツを引っくり返したような水量で潮が床へと迸っていた。

最も長い付き合い故に、お互いに安心して快樂へと没頭していた。

涼芽は、翔太が相手なら気兼ねなく本能を曝け出せる。

翔太も、涼芽が相手なら容赦なく「男」を晒すのだった。

キスしながらもムンムン漂う涼芽のフェロモン。一旦、唇を離して顔を窺う。

予想通り、涼芽の顔は快樂でぐしゃぐしゃになっていた。

毛穴という毛穴から汗が噴き出して、全身の皮膚がとろとろにふやけていた。

「ヒドイ顔だな」

「ふええええ、誰の所為だと思ってるの……」

「でも、そんな顔の涼芽も可愛いぞ」

「ふあああっ!? ダ、ダメツ……!! そんな、翔ちゃんに言われたらあああっ!!

ふあああああっ、んくううううっ!!」

「……床掃除が大変だな、こりゃ」

「えへへ、翔ちゃんのこと大好きなんだもん♥ね、保健室に行こッ!？」

「お、おい、いきなりかよ……だったら、部活終わってからで良いじゃねえか」

「ダメー、こんなんじや部活なんて出来ないよ。翔ちゃんも分かってるでしょ」

「……そうだな」

翔太の手を引いて足早に廊下を進む涼芽。スカートから漏れる愛液からしても確かに、これでは部活への集中は不可能だろう。生まれつき業を背負った翔太もそれは十分に理解していた。

また、翔太も年頃の男子である。久々の学園には募るものがあり、翔太もまた涼芽への期待に股間を昂らせている。引き籠もってからは、定期的に家へと来る涼芽くらいしか相手に出来ていない。その涼芽とも一か月ぶりの再開なのだ。

翔太だって溜まっっている。人目を掻い潜り、慌てて保健室へと押し掛ける。

二人して待ち切れないと言った風に、無言で保健室のベッドへと雪崩込んだ。

「一か月ぶりの再開なのに、こんな……相変わらずだなあ、俺達は」

「もうっ、世間話は終わってからっ!! 翔ちゃんは知らないでしょ、翔ちゃんの魔法に罹ったら、女の子がどうなっちゃうかっ!! 終わるまで止まらないの……だから、お願い……い、いっぱい舐めてよおっ!!」

ショーツが食い込み、くつきりと筋が浮かんでいる秘部……水に漬けたような下着が秘蔵から陰毛までも明瞭に透けさせている。濡れて陰毛まで見える光景に異様な興奮を示した翔太は、下着の上から啜陰した。

パンツに浮かぶ線に沿って舌を這わせる。

その瞬間、弾けたように涼芽の身体が浮く。

「ひやあああつ、あああああつ、あああああつ、あああああつ!!」

「じゅっ、じゅぷっ、ぬぷっ、くちゅっ……涼芽……んっ、凄……んちゅっ、

んっ、潮まで溢れて……じゅぞぞぞぞぞっ、んぞぞぞぞぞっ!!」

「あああああああつ、吸い付かないでえええっ、それヤバいのおおっ!!」

気配を感じただけで発情。触ればオーガズムに達するくらいに翔太の体質は凄まじい。局部を舐められれば、もはや常人では理解に及べないレベルの快樂が全身を蝕んでいく。昔から翔太に相手してもらい、慣れているハズの涼芽でさえ潮噴き、気絶、全身の痙攣を止められなかった。

「んぐええええええええっ、ぐげええええええええええええっ!!」

潰れたカエルのような悲鳴が木霊する。断末魔を叫びながら、ボタンボタンと何度もベッドに背中を悶え打つ。まるで電気ショックスを浴びせられたように……

瞳はひっくり返り、涙、鼻水、涎……あらゆる体液を垂れ流していた。

「んげえええええ、ぐげえええええ……!!」

「つたく、相変わらず女ツ気の無い叫びだ。まあ、こんな悲鳴しか聞いたことがないんだけど……そろそろ生で見させてもらおうぞ」

「あつ、あつ、あああつ、こ、こんな状態で、直接舐められたらっ……あああ
あああああつ、そ、それだけでっ、それ考えただけでっ、あああああつ!!」

「脱がすぞ………ははっ、まるで生きてるみたいにヒクヒクしてるな」

「だって、い、生きてるもんっ、あ、あ、ま、ま、まだ、舐めない、で？」

「ダメだ。気持ち良くするって言ったろ。んっ、じゅるるるるっ!!」

「びぎやああああああああああああああああああああああああああああ!!」

「ぶわああっ!？」

静止を聞かずに、今度は開眼した肉壺へと直に舌を伸ばした。

途端に、女の汗が翔太の顔面を洗い流す。顔面を、上半身を、容赦なく穢す。間欠泉にも等しい勢いで女潮は舞っていた。

しかも止まらない。一分、二分と、潮が吹き荒ぶ。堪らず翔太が顔を離すと、それは天井にまで届きかねない巨大な弧を描いたのだった。

圧巻であるも、翔太にとっては全く珍しくない光景でもあった。

「こんなエロい女にはお仕置きが必要だな。おい、もう挿入れるぞ」

「ま、ま、待つ……こ、な状況で挿入られたらっ、あっ、ダメ……」

「無理だ。もう我慢できねーよ。お前の潮を浴び続けた所為でな」

「あ……あ……まつ、ぎやあああああああああああっ!!」

異性のフェロモンを一身に浴び続けた翔太は限界だった。

ズボンを脱いで現れた股間は、女を満足させる為だけに生まれてきたような、そんなサガを見せつけるように怒り狂っていた。

血管を浮き上がらせて本能を剥き出しにしている。

試しに触ってみると、翔太本人でも驚くくらいの硬さを誇っていた。

射精欲が先行して、涼芽への忖度も無く亀頭を壺へと押し込んでいく……と、またしても尿道から歓喜の叫びが迸った。

「うお、濡れ過ぎてて緩々だぜ」

「ああがああああ、じよ、女子に向かって緩々とか言うなああああっ」

「動くぞ」

「だあああああああああああああああああああ!!」

翔太のセックスにあるのは「動」のみである。

どう動いても女子は快楽に溺れるのだから、工夫した動きなど不必要だった。

ただ、利己的に、乱暴に腰を振るうだけだ。

涼芽の肉窟は完全に蕩け切っており、勢いに任せるとペニスが抜けてしまう。気を遣う点といえ、それくらいだった。

力任せに亀頭を奥へ奥へと叩きつけていく。

女を鳴かせる天性の業を受け持つ翔太は、ペニスすら一線を画している。

一突きする度に、ズシンと子宮に絶大な衝撃が響き渡った。

「あがああつ、ああああああつ、ひやああああああつ!!」

「やば、やっぱり涼芽の……最高だぜつ、おらつ、もう出すぞつ!!」

「死んじやう、死んじやう……翔ちゃんの、中に出されたら……ああああ……」

気持ち良すぎて……こ、今度こそ死んじやう……うああああ……!!」

「死なないから。行くぞ、ラストスパートだつ!!」

翔太にとって女は、陸へと放たれた魚も同然である。

ただ、ピチピチと無造作に跳ねるだけで一切の抵抗も叶わない。

そして美味しく頂かれる結末だ。

射精欲を極めた翔太は、最終段階として全速力で動き出す。

涼芽と言えば、一突きで絶頂、一突きで潮噴き、一突きで気絶、一突きで目が

醒める……それを繰り返す以外に無く、最後は容赦なく中出しの餌食となった。

「ひえ、え……」

「はあ、はあ……一回の射精で五発分は出した気分だ……はあ、はあ、はあ、はあっ」
「う、あ……翔……ちや……も、も、終わり、なの……？」

「おい、なんだよ、その物欲しそうな目は」

肉棒を引き抜く際に、ピュルツと飛び散る愛液が儂い……

と、悟ったように微笑む翔太。だが、涼芽は離れていく男根に憂いを感じる。
翔太は呆れつつ、涼芽の腹部を撫でた。

「お前、腰砕けてるだろ。それ以上は無理だ。俺も、久々だったからなあ……」
この一回で精根を使い果たしたよ……
と、言いかけた時だった。

そう……ここで終わるものなら、翔太も自身の業に感謝さえしたい程なのだ。
しかし、ここで終わるものなら、わざわざ悩まされたり病んだりはずせ……

「もしかして、と思つて隠れて付いてきてみたら、やっぱりねえ♡」

「旭川さんく？ 部活を勝手に抜け出して、こんなことやつてたのく？」

「ねえく、翔太君……二年生の翔太君……だよね？」

「だ、誰だッ……!？」

「う、あ……せ、先輩方っ!？」



二人のプライバシーを尊重していた仕切りのカーテンが勢いよく開かれる。翔太の視線の先には、複数の女子が立っていた。目が合うと、女子たちが一斉にベッドへと雪崩掛かってくる。

全員が、なにやら紅潮しており、しかも全身が汗だくである。

ずっと涼芽との行為を見ていたらしい一同は、既に出て来た様子だった。あれだけ周囲に気を配っていた翔太も、久しぶりの性交には集中してしまい、忍び寄る人影を全く察せなかったらしく、唐突の訪問者に翔太が飛び上がった。下半身が丸出しの涼芽も、流石にバツが悪そうに慌てて身体を起こす。

その口ぶりから、吹奏楽部の三年生だと翔太も察知する。

同時に、このままでは済まされないということも……

「はあ、はあ、翔太、くん……覚えてる、かしら……入学式の日……」

「……え？」

「覚えてない、か……そうだよね、翔太君モテモテだったから……」

と言い、ペニスを勃起した儘の翔太へと迫る女子は、吹奏楽部の部長だった。

高揚を抑えられない面持ちで翔太に近寄ってくる。まるで他の景色なんて目に見えていないと言った風に。顔が迫り、正に目と鼻の先の距離になる。部長は、赤ら顔で翔太の頬に触れた。

「翔太君を初めて見た時から、私……ああ、ごめんなさいっ!!」

「んぐっ!？」

「ぶ、部長っ!？」

「あああつ、翔太君ッ、翔太君ッ、ずっと、会いたかったのお……!!」

我慢の限界だと言いたげに部長の唇は重なった。

涼芽だけでは終わらない。性行為をすれば、翔太のフェロモンは噴出する。

学舎に拡がる影響力が吹奏楽部を侵したのだ。

即ち、女の発情は連鎖する。少なくとも、業へと見入られた吹奏楽部の集団を

鎮めるまでは、翔太に自由なんて戻らないのだった。